

日本民俗学会第 57 回年会プログラム

2005 年 9 月 9 日 日本民俗学会第 57 回年会実行委員会

第 57 回年会概要	1
8 日 (土) 公開シンポジウム (発表要旨・企画趣旨)	2-5
9 日 (日) タイムテーブル	6-7
各会場配置図	8
各会場進行表	9-19
アクセス・会場周辺地図・構内地図	20-21
年会参加者のみなさまへ	22
一般発表者のみなさまへ	23
分科会発表者のみなさまへ・一般発表の座長のみなさまへ	24



2005 年 10 月 8 日 (土)・9 日 (日)
東京大学駒場キャンパス

日本民俗学会第 57 回年会プログラム

2005 年 10 月 8 日(土)

- 09:30-10:30 理事会 (駒場ファカルティハウス・セミナールーム)
10:30-11:30 評議員会 (同上)
11:30- 参加受付開始 (12号館 1F ロビー)
13:00 開会あいさつ
13:05-17:00 公開シンポジウム (13号館 1323号室)
「野の学問とアカデミズム：民俗学の実践性を問う」
▽ 13:05-13:50 基調講演=伊藤亞人（東京大学）
▽ 13:55-14:05 発題=菅豊（東京大学）
▽ 14:05-15:35 パネリストによる発表
佐藤健二（東京大学）
小国喜弘（東京都立大学）
鬼頭秀一（東京大学）
▽ 15:45-16:00 コメンテーターによるコメント
刀根卓代（女性民俗学研究会）
佐藤雅也（仙台市歴史民俗資料館）
伊藤亞人（東京大学）
▽ 16:00-17:00 ディスカッション
17:00-18:00 奨励賞授与式、会員総会 (13号館 1323号室)
18:30- 懇親会受付開始 (駒場エミナース・ダイヤモンドルーム前)
19:00-21:00 懇親会 (駒場エミナース・ダイヤモンドルーム)

2005 年 10 月 9 日(日)

- 09:00- 受付開始 (12号館 1F ロビー)
09:30-11:30 午前・研究発表 (12・13号館)
11:30-13:00 昼食
13:00-17:00 午後・研究発表

会場

- [研究大会] 東京大学駒場キャンパス (東京都目黒区駒場 3-8-1)
[懇親会] 駒場エミナース (東京都目黒区大橋 2-19-5)

公開シンポジウム

野の学問とアカデミズム：民俗学の実践性を問う

13号館 1323号室

基調講演 13:05-13:50 伊藤 亞人（東京大学）

民俗学の周縁性と実践

【要旨】 民俗学という学問は、その対象である民俗知識と思考の特質を反映している点で、まさしく土着の学問である。民俗知識は地域の生活経験の中で蓄積されてきた知識であって、論理的体系性を成さない個別知識の集合である。東アジアにおける儒教や仏教などの論理体系的な教えや近代の科学知識を拠り所とした学問が、抽象的な論理によって人間や世界の普遍像を説き、その体系の中に個別の経験や事例を位置づけて解釈したり予測したりする思考を重視するのとは異なり、民俗知識は個別の物と場に即した具体的な知識であり、もともと生活実践と不可分のものであるが、普遍性を論理体系的に説く東アジアの大伝統や近代の科学主義と世界システムのもとでは周縁的なものと見做されてきた。しかし、開発の現場で民俗知識に拠る実践志向的な開発手法が再評価されているとおり、地域社会の活性化においても民俗学の実践的な手法を肯定的に位置づけることが求められている。

発題 13:55-14:05 菅 豊（東京大学）

パネリスト1 14:05-14:35 佐藤 健二（東京大学）

野の学問の苦境

【要旨】 「野」と「実践」という二つが焦点であり、どう結びつけるかが問われるべき課題だと受け止めた。「野の学問」は、これを「ノの」と重ねて読めば美しくひびき音は、学ぼうとする人を広いフィールドという採訪の現場へと誘うだろうし、「ヤの」と強く発音すれば、野党や野に下るの語とともに、制度の外で育った民間学の対抗性という特質を浮かびあがらせる。趣意書は、ややスローガン的に、「研究対象の在野性」と「研究主体の在野性」と述べるが、位置だけをそのように固定的にとらえるのは十分でない。〈対象〉と〈主体〉だけでなく、もうひとつ重要なのが〈方法〉である。「野」も「実践」も、まさしくこの〈方法〉にかかわらせて理解すべきではない。

「民俗学」と呼ばれてきた学問が、いかなる批判の「実践」として立ち現れてきたのか。その歴史をあらためて踏まえ、現在を考えなおす必要があるだろう。私自身は、これまで近代日本語における二重構造、声（口承）への注目の方法性、学問運動のネットワークとしての郷土研究、広場として雑誌の意味、「定本柳田国男集」の功罪、新語論の射程、「複数の柳田国男」など多くの論点を組み合わせながら、柳田国男を中心に、その学問の可能性を考えてきた。〈書かれたもの〉がもつ社会的装置としての意味と、そのなかを生きる読者という主体の実践が作り上げる「読書空間」モデルにおいて民俗学の実践を位置づけるなら、それは「リレーションナル・データベース」のメタファーで指し示せるであろう資料空間の構築である。それがいかなる主体によって、またいかなる場において形成され、変形され、批判され、再編成されていったか。

このリレーションナルなデータベース構築の実践が直面している困難にこそ、現代の民俗学の苦境がある。その問題は、おそらくひとり民俗学だけに限られない、学際的な拡がりを有している。そことどのように取り組むべきか。

パネリスト2 14:35-15:05 小国 喜弘（東京都立大学）

伝統の創造と学校教育

【要旨】 野の学問からアカデミズムへと民俗学が変貌を遂げた時、民俗学と教育学との間に大きな隔たりが生まれることになったのではなかろうか。1935年民間伝承の会の設立当時、「野の学問」としての民俗学を支えたのは小学校教師であったし、よく知られているように柳田国男の民間伝承論は学校教育への関心が強かった。共同体の再生産と文化の世代間継承を重要な主題とする点からすれば民俗学と教育学は本来関わりの深い学問であつ

た。しかし、アカデミズムとしての民俗学は、学問としての厳密さ・資料操作法の客觀性を重んじる中で、子どもの教育環境をトータルに捉え、その改善の方途を探ろうとすることに禁欲的であったのではないだろうか。

近年、様々な地域における民俗芸能の伝承を考えたとき、学校教育は重要な役割を果たす存在になりつつある。保存会などが学校で芸能を教える動きが活発化しているからだ。

ただし学校での取り組みは、単に学区にある芸能を子ども達に忠実に継承するという試みに止まらない複雑な様相を帯びている。教師たちはしばしばその地域に全くない芸能を他地方から学び、その芸能を運動会用等に大胆に再構成して子ども達に伝えようとしている。時には学校で子どもたちが学んだ他地域の芸能が学区での祭に上演され、郷土の芸能として根付くことすらある。付け加えれば、文部科学省の伝統文化教育推進事業など、民俗芸能の教育を、ナショナルな統合に改めて利用しようとする動きも活発化している。

報告では、学校を舞台とした民俗継承の取り組みを手がかりとして、民俗学と教育学とを改めて架橋する可能性について模索したい。しかしそれは既存のアカデミズムの閉塞性を打破し新たなアカデミズムを構築しようとするもろみからではない。弛緩しつつある社会の共同性の再構築とそこに住む人々の幸せをいかに追求するのかという実践性を一方の課題としつつ、民俗と教育にかかる新たな理論構築をなし得ないか、考えてみたいのだ。今回は、その第一歩としての問題提起を行ってみたい。

パネリスト3 15:05-15:35 鬼頭 秀一（東京大学）

「野の学問」の歴史的屈折と学問と社会の新境地

【要旨】 どのような学問領域(discipline)においても、学問の制度化(disciplinization)は必然的に起こる。方法論が整備され、教科書ができ、学会誌により学問として認められたものだけがアカデミックな業績として引用され、蓄積されていく。アカデミックなポストが整備され、学問を職業として行うことができるようになり、一定の方法論的枠組みの中で対象を把握できるようきちんと訓練(discipline)され、弟子が育っていく職業的養成機関が整備されていく。その中でアマチュアリズムは排除されるか棲み分けがなされる。しかし、制度化された学問はときとして「社会」との回路を失い、蛸壺化し、まさに学問のための学間に埋没していき、一方で権威づけられていくことにより「権力」として機能していく。1960～1970年代にはそのような学問に対する問い直しが行われ、科学論や学問論が盛んに議論された。その当時、民俗学はまさに「野の学問」であり、制度化された学問にはないエネルギーを感じた人たちにとって大変魅力的であった。しかし、民俗学の内部では制度化の必要性が感じられ押し進められていったように思う。いま、民俗学で「野の学問」が再考されるという歴史的屈折を考えたとき、「野の学問」の意味について現代的な意味づけをするには意義深いかもしれない。制度化を打破し、「社会」との回路を創り出していくため、「学際的(inter-disciplinary)」方法論が模索されたりしたが、近年では、研究者自身が学問領域を越境していく「trans-disciplinary」な方や、「問題指向型(problem-oriented)」な方方が注目されている。その真髄を一言で言えば、「現場(field)」を狭い学問的方法論で切り取るのではなく、その全体をまるごと捉えるための方法論ではないだろうか。そこにこそ「discipline」を越える可能性が見いだされる。「野の学問」が現代的意味を持ち、学問と社会の間に良好な関係を築こうとするのであれば、「現場をまるごと捉える」という意味での「野」の学問がいま求められているのではないだろうか。

コメント1 15:45-15:50 刀根 卓代（女性民俗学研究会）

【お知らせ】

本公開シンポジウムの案内ポスター(A2判)を配布しております。ご希望の方は、年会事務局までご一報ください。大学・博物館ほか、多くの方に目にふれる場所にご掲示いただければ幸いです。

デザインは、<http://anthrop.c.u-tokyo.ac.jp/fsj57th/symposium.html>にてご覧いただけます。

コメント2 15:50-15:55 佐藤 雅也（仙台市歴史民俗資料館）

コメント3 15:55-16:00 伊藤 亞人（東京大学）

討論 16:00-17:00

第 57 回日本民俗学会年会シンポジウム
『野の学問とアカデミズム：民俗学の実践性を問う』
菅 豊・岩本 通弥・中村 淳

1. 目的と内容

民俗学は、日本近代の学問史のなかにおいて、官学アカデミズムとは異なる「民間学」の系譜を引くことは明らかであろう⁽¹⁾。その出自ゆえに、民俗学は、研究対象の在野性と、研究者の在野性という、少なくとも二重の「野」の性質を強く帯びるとともに、「野」の担い手、あるいは代弁者としての役割をも自負し、また期待されてきたといつても過言ではない。

その学史を繙くまでもなく、日本の民俗学の形成・確立期である 1920~30 年代より、民俗学、より正確にいえば、その主導者であった柳田國男は、民俗学の実践的、実用的な学問のあり方を表明し続けた。そのため、民俗学の基底的な学的あり方は、当初から在野性を帯びることと表裏一体の関係にあった。彼の発した「私たちは学問が実用の僕となることを恥としていない」「終局は人生の御用学者」という言葉は、実際の研究に反映、実現化されたか否かは別にしても、その後の多くの民俗学者の姿勢を規定してきたことは確かであろう。

宮本常一の名をあげるまでもなく、「野」に強くかかわり続ける人々も多く、「野の学問」を標榜することも一般化していった。柳田の「経世済民」の志も、終生変わることはなかった。晩年、民俗学が制度的に体系を整え、アカデミズムのなかにも進出し⁽²⁾、そこで一定の地位（あくまで民俗学草創期と相対的な制度的な地位）を得はじめた際には、むしろその実践性、実用性への関心が希薄していくことを憂い悲しんだ。しかし、それから半世紀以上が経過し、民俗学が曲がりなりにも学問として市民権を認められる一方で、「市民」社会との関係性の再構築を含んだ、学問全体の大衆化が急速に進んでいる今日、民俗学者が自負してきた「野」との関わりは、必ずしもその専売特許ではなくなりつつある。今、その在野性の意味を、民俗学は改めて見つめ直すときを迎えている。

官学アカデミズムを、近代国家が主導し、その研究の主題と目的が国家の発展に寄与するもので、かつその方法論のほとんどを輸入に頼ったディシプリンの一群と見なすとき、確かに草創期の民俗学は、その枠組みから大きくはずれる「野の学問」=民間学であった。民俗学は、紛れもなく近代国家の成立による所産ではあるが、少なくとも旧帝国大学の講座に位置づけられたような、国家によって主導され保護された学問ではなかった。また、その研究の主題と目的は、国家が捨象してきた「民衆」にこそ存在するとも考えられてきた。そのような状況下においては、民俗学に在野性の性格を付与し、意義づけることは、官学アカデミズムに対する批判的価値を持っていた。言い換えれば、それは、かつて官学アカデミズムが追求してきた国家的価値に対してアンチテーゼとなる「民衆」的価値である。

しかし、「市民」社会を標榜する現代社会では、官学アカデミズムという枠組みで厳然とくくられるような、単純な学問区分や学問分野はすでに存在していない。いずれもその向き合う主題と目的とを、国家的価値から、「市民」的価値に照準を合わせて、学的スタンスを大きく変化させてきた。いわば官学アカデミズム

の側も変貌し、「市民」社会のなかの学問へと大きく舵を切ったといえよう。その一方で、民俗学が対象化してきた「野」も、高度経済成長以降、「民衆」に置き換わるものとしての「市民」を想定する必要があるほどに、その対象自体が大きく変貌してきている。

さらに、現在、民俗学の草創期には想像できなかっただほど、民俗学が高等教育のなかに進出している。未だ学界全体のなかでは「周辺」の極にあるとはいっても、多くの民俗学研究者は、大学教育など制度的ないわゆるアカデミー (= professionalism)⁽³⁾ のなかで専門的で高度な訓練を受けている。さらに、そのアカデミーに籍を置くプロフェッショナルな研究者も増加しつつあり、ある部分では官学アカデミズムの系譜に属する学問分野の研究状況と、何ら変わらない位相に民俗学も位置しており、単純に「在野の学」を名乗ることは、もはや不適切である。

一方、民俗学は、その研究の重要な担い手として、制度的なアカデミーには属さない多くのアクターを、今も包含している。古くは、その担い手は教育現場で「実践」する小中学校の教員層であった。しかし、今日では、民俗学の高等教育を受けたのち、博物館や文化財行政等で活躍する学芸員などが民俗学の担い手として重要な位置を占めている。このような、制度的なアカデミーの外にいながらも、制度的な公的機関に属する民俗学研究者の活躍が、民俗学を支えているといつても過言ではなかろう。それは「市民」と対面した新たな形の「実践」の場で活躍するアクターであって、その数はアカデミーに属するアクターを超えて、大きなムーブメントを起こす力を秘めている。

加えて民俗学の場合、アカデミーでの専門教育を受けずとも、自らの人生経験の中での疑問等を機に、「生活実践」の追求、延長として、この学間に参画する人々も数多い。その意味では、学問の存在位相は、今も他の学問と比べて在野性を強く保持しているともいえる。いわゆるアマチュアとプロフェッショナルの垣根がないだけでなく、民間伝承の会以来、「民衆」・「市民」に開かれた形で、積極的にその生活疑問を取り込み進んできたのが、この学会の最大の特徴であろう。民俗学に関わる人々のバリエーションは、他学間に比べ顕著な多様性を有しており、その多様性は民俗学の在野性によって実現されている。

学問全体の「市民」社会への方向転換は、本来ならば民俗学が体現しているはずのものであった。しかし、その在野性とそれに付随する実践性は、残念ながら草創期の表明以上に今日の民俗学で実現されているとはい難く、また学問への市民参加の問題は、他の学問分野ほど、積極的に論議されてはこなかった。さらにそれは「市民」だけでなく、国外との交流や他の学問との交流も閉ざしがちの自給自足的な傾向さえ漂わせ、むしろ科学性のレベルにおいて、アカデミズムのなかでは知的孤立化の方向にあるのではないかとの疑惑も禁じえない。

このような現状認識に鑑み、民俗学が今、どのように在野性を考えるべきか、特に実践性の上で、その可能性と課題について検討するのが、本シンポジウムの目的である。

表1 民俗学にかかわるセクター

- I. アマチュアのフォークロリスト
- II. アカデミック・フォークロリスト
- III. パブリック・フォークロリスト⁽⁵⁾ …公共のセクター（public sector）に関わる人々
…e.g. 文化行政担当者、博物館学芸員、（大学以外の教育機関の）教職員、NPO
- IV. アプライド・フォークロリスト（狭義）
…e.g. デヴェロッパー、コンサルタント、アーティスト、マスメディア

2. 論点

議論をより明確にするために、検討される研究者の布置・構図を、アメリカ民俗学界で一般化されている図式を参考に、歴史的発生順を加味して、あくまで便宜的に、以下のように弁別⁽⁴⁾しておこう。民俗学に関わる人々は、表1のようなセクターに分けられる。

このように民俗学の扱い手を、あくまで便宜的に分けた上で、議論となる点を例示すると、下記のようになるだろう。

(1) 民俗学における「市民」参加の問題

すでに述べたように、民俗学は他の学問に比べ、在野性に富み、「野の学問」も標榜してきたことから、日本民俗学会においては、大学・研究機関に属するいわゆるアカデミック・フォークロリスト以外に、多くの民俗学研究者が活動の場を広げ、活躍してきた。その中にはアマチュアのフォークロリストも多数含まれる。このアマチュアリズムを尊重してきたことこそ、これまでの日本民俗学会のひとつの特徴であり、強みでもあった。そのことを念頭におきつつ、現在の「市民」社会において、「市民」が積極的に民俗学という学間に参画すること、また学問としての民俗学が「市民」と繋がっていくことの、可能性とその問題点、あるいは功罪を見通しながら、今後の民俗学のあり方を考える必要がある。

(2) 民俗学における実践（応用）の問題

在野であることは、大学などのいわゆるアカデミックな研究者の枠以外にも、民俗学に従事・参与する職業セクターが存在することを意味する。しかし、これまで、目的、方法、社会的役割などにおいて、異なったアクターが同時に同じ学問資源にアクセスする現実は見過ごされてきた傾向にある。たとえば地域博物館のような典型的な公的セクターに関して、従来、大学に連なる研究組織というイメージで、そこでの研究環境などについての（研究者自身のための）問題提起はなされていた。しかし、今後は公的セクターとして、地方行政や地域住民と最も直接的に向かい合った形で民俗学に参画していることを、より正当に位置づけ、評価・検討しなければならない。今後は、パブリック・フォークロアに代表される広義のアプライド・フォークロアの扱い手が、民俗学においてますます質・量ともに重要性を高めることが予想される。そのため、アカデミック・フォークロアにはない独自の可能性や、独自の問題設定を、もっと積極的に行う必要があろう。

(3) 多様なアクターの協働と責任・倫理の問題

現前にある目的、方法、社会的役割の異なるアクター間の、現状における問題点を整理することがまず重要であるが、その上で、それぞれのアクターの分業と協働のあり方、共通して担わなければならない責任・倫理という問題について考える必要がある。たとえば、アマチュアとはいっても、民俗学が学問である以上は、科学性が求められるのはいうまでもなく、その意味で、「野の学問」あるいはアマチュアリズムと、科学性あるいはアカデミズムとは対立語ではない。マスメディアやコンサルタント、デヴェロッパー等による民俗学の「応用」を含めた、協働のあり方や研究倫理を、従来の視点に囚われることなく、幅広い観点から再構想していく必要があろう。

【注】

- (1) 「民間学」としての位置づけや官学アカデミズムとの関係性については、鹿野政直（1983）を参照。
- (2) 戦後あるいは高度経済成長以降の民俗学は、実践性・実用性を弱め、アマチュア（好事家）との分離を図ることで、アカデミーの地位を得たともいえなくない。
- (3) アメリカ民俗学において、民俗学の公共性、そして応用について主導した研究者のひとりである D. Shuldiner は、学問世界の professionalism を academy と同義な言葉とし、それと対置するものとして public sector（公共セクター・公的部門）を設定している（Shuldiner 1998）。この構図は、現在のアメリカ民俗学において、民俗学の応用性を考えるための研究史を表明する場合の常套的な見方と考えて差し支えなかろう。
- (4) アメリカでは、かつて R. Dorson を代表とするアカデミック・フォークロアからの極端な批判と攻撃が、B. Botkin を端緒とするアプライド・フォークロア（現在のパブリック・フォークロアも含む）になされていたことは有名である。それは、批判という以上に、侮蔑的な（pejorative）言葉であったことを、Shuldiner は言及している（Shuldiner 1998）。ただし、アメリカにはアマチュアのフォークロリストという区分はないが、日本の学史や現状を踏まえて、これを含めた。
- (5) パブリック・フォークロア（Public Folklore：公共に関わる民俗学）とは、ここ数十年のアメリカ民俗学界で大きな地位を占めるに至ったセクションである。パブリック・フォークロリスト（public folklorist：公的セクターに関わる民俗学研究者）は、アメリカの場合、大学ではない芸術や文化、あるいは教育などの組織に属する人々を指す。具体的には、芸術などの文化的な審議会（arts councils）や、文化遺産に関わる歴史系の協会（historical societies）、図書館、博物館、非営利の民俗芸術や民俗文化組織などで活躍する民俗学関係者である。パブリック・フォークロアは、フィールドでの調査、記録のみならず、たとえば、パフォーマンスや民俗芸術の専門教育、展示、催事、音声記録、ラジオやテレビ番組、ビデオや書籍などの公共的なプログラムや教育関係の素材を生み出す活動に従事している。アメリカ民俗学の中心的な組織であるアメリカ民俗学会（AFS）会員の約半数の著作が、今やパブリック・フォークロリストとして書かれたものと分類される状況にまであるという（AFS online : publicFL[1]）。

【文献 / Webpage】

鹿野政直 1983『近代日本の民間学』岩波書店。

Shuldiner, David 1998 "The Politics of Discourse: An Applied Folklore Perspective." *Journal of Folklore Research* 35/3: 189-201.

The American Folklore Society (AFS), publicFL[1], <http://afsnet.org/aboutfolklore/publicFL.cfm>, date of access: 05/13/05.

9日(日)タイムテーブル

	A会場 1212号室	B会場 1214号室	C会場 1213号室	D会場 1311号室	E会場 1312号室	F会場 1222号室
定員	72名	72名	72名	77名	76名	72名
09:30 - 09:55	A-01 井上政行	B-01 井山裕文	C-01 陶治	D-01 伊藤康博	E-01 桜井準也	F-01 折橋豊子
10:00 - 10:25	A-02 平澤洋一	B-02 金丸良子 田畠久夫	C-02 上相英之	D-02 吳賢欗	E-02 尾崎聰	F-02 八木沢滋夫
10:30 - 10:55	A-03 寶城涼子	B-03 伊東久之	C-03 立花弥生	D-03 徳丸亞木	E-03 橘弘文	F-03 近藤功行
11:00 - 10:25	A-04 陳玲	B-04 北村敏	C-04 籾元晶	D-04 渡部圭一	E-04 諫訪山玲似子	F-04 林美枝子

13:00 - 13:25	A-05 浅野弘光	B-05 谷口陽子	C-05 角南聰一郎	D-05 鈴木洋平	E-05 久下正史	F-05 一矢典子
13:30 - 13:55	A-06 村尾美江	B-06 後藤麻衣子	C-06 渡部典子	D-06 エルメル・ フェルトカンプ	E-06 東條さやか	F-06 森本一彦
14:00 - 14:25	A-07 佐野恵子	B-07 佐々木哲哉	C-07 姜椿姫	D-07 鈴木岩弓	E-07 谷川隼也	F-07 前野雅彦
14:30 - 14:55	A-08 幸田有美子	B-08 竹中玲磨	C-08 細木ひとみ	D-08 沼崎麻矢	E-08 吉田扶希子	F-08 平野孝國
15:00 - 15:25	A-09 金岡由紀子	B-09 土田拓	C-09 高橋泉	D-09 加藤正春	E-09 松村薰子	F-09[分科会] 白川琢磨
15:30 - 15:55	A-10 立石尚之	B-10 中川千草	C-10 大江篤	D-10 林英一	E-10 西尾正仁	入江亜矢子 中西裕二 政岡伸洋
16:00 - 16:25		B-11 石本敏也	C-11 佐藤喜久一郎	D-11 鈴木由利子	E-11 俵谷和子	
16:30 - 16:55		B-12 菅豊	C-12 小池淳一	D-12 與那覇潤	E-12 工藤紗貴子	

G会場 1225号室	H会場 1321号室	I会場 1322号室	J会場 1232号室	K会場 1331号室	定員
108名	77名	76名	72名	140名	
G-01 門田岳久	H-01 柏木亨介	I-01 矢島妙子	J-01[分科会] 神田より子	K-01 渡辺一弘	09:30 - 09:55
G-02 土居 浩	H-02 能門伊都子	I-02 田野 登	宮坂 清 神田より子	K-02 岩橋磨州	10:00 - 10:25
G-03 岸本昌良	H-03 小山喜美子	I-03 阿南 透	中山和久 藤野陽平 猿渡土貴	K-03 宮岡真央子	10:30 - 10:55
G-04 桑山敬己	H-04 田中久美子	I-04 加原奈穂子	岸 昌一 小川 修 森 悟朗 市田雅崇 鈴木正崇	K-04 野口憲一	11:00 - 10:25
G-05 丸山泰明	H-05 伊藤信明	I-05 由谷裕哉		K-05 蘇理剛志	13:00 - 13:25
G-06 矢野敬一	H-06 世森かん奈	I-06 石井克生		K-06 小野寺節子	13:30 - 13:55
G-07 山田巣子	H-07 川野和昭	I-07 伊賀みどり		K-07 片倉綾子	14:00 - 14:25
G-08 岡田浩樹	H-08 大部志保	I-08 加賀谷真梨		K-08 今井 信	14:30 - 14:55
G-09 森田真也	H-09 樺村賢二	I-09[分科会] 小島孝夫 田中宣一 山崎祐子 富田祥之亮		K-09 安藤直子	15:00 - 15:25
G-10 菊地 曜	H-10 高松敬吉			K-10[分科会] 法橋 量 出口雅敏 竹中宏子	15:30 - 15:55
G-11 山下裕作	H-11 宮下良子				16:00 - 16:25
G-12 中野紀和	H-12 村松彰子				16:30 - 16:55

各会場配置図



A会場

1212号室・72名

- A-01 09:30-09:55 井上 政行（東京都）
民俗行事の本質の語源的側面からの再検討（その二）
- A-02 10:00-10:25 平澤 洋一（東京都）
童遊びの意味特徴と体系化
- A-03 10:30-10:55 審城 涼子（東京都）
嫁入り人形今昔
- A-04 11:00-11:25 陳 玲（新潟県立歴史博物館）
中国舟山のある産育儀礼にとっての人形劇——映像分析という方法を通して——
- A-05 13:00-13:25 浅野 弘光（岐阜県）
庶民神、廁神の遍歴
- A-06 13:30-13:55 村尾 美江（香川県）
贈答儀礼にみる「礼法」の影響
——小笠原流と一般の金封及び水引の比較を通して——
- A-07 14:00-14:25 佐野 恵子（京都府）
貿易扇——時代を担った京都の産業——
- A-08 14:30-14:55 幸田 有美子（東京都）
「狐の施行」習俗の行事形態について
- A-09 15:00-15:25 金岡 由紀子（埼玉県／日本塩業研究会）
「もち」をご神体とする〈みこし型「亥の子」〉と能勢もちについて
- A-10 15:30-15:55 立石 尚之（茨城県）
ことようかに訪れる神——茨城県のササガミサマ——

B会場

1214号室・72名

- B-01 09:30-09:55 井山 裕文（神奈川県）
越後湯沢における狩猟の現状について
- B-02 10:00-10:25 金丸 良子（千葉県／麗澤大学）・田畠 久夫（千葉県）
中国 大花ミヤオ族の生業形態
- B-03 10:30-10:55 伊東 久之（岐阜大学）
鵜飼漁法の日本の特色 ——鵜の越年問題——
- B-04 11:00-11:25 北村 敏（東京都／大田区立郷土博物館）
岩海苔採取権と頭屋制度 ——島根県平田市十六島の場合——^{いわのり うつぶるい}
- B-05 13:00-13:25 谷口 陽子（東京都／お茶の水女子大学大学院）
行政による地域再編と住民による地区統合
——山口県下関市豊北町矢玉地区を事例として——
- B-06 13:30-13:55 後藤 麻衣子（埼玉県／昭和女子大学）
雪室の比較研究 ——福島県野尻川流域の場合——
- B-07 14:00-14:25 佐々木 哲哉（福岡県）
炭坑社会のメンタリティ ——筑豊炭田と川筋気質——
- B-08 14:30-14:55 竹中 玲磨（神奈川県）
山間村落の変容に関する一考察 ——岐阜県飛騨地方を事例として——
- B-09 15:00-15:25 土田 拓（神奈川県）
オホーツク海沿岸域における農家の定住戦略と厩舎景観
- B-10 15:30-15:55 中川 千草（兵庫県）
浜辺を「モリ（守り）」する ——半栽培的自然維持のあり方——
- B-11 16:00-16:25 石本 敏也（新潟県）
田作りの農意識
——佐渡トキの田んぼを守る会の活動を事例として——
- B-12 16:30-16:55 菅 豊（東京大学東洋文化研究所）
地域の資源と正当性 ^{レジティマシー} ——明治期の地方における「公益」の発見——

C会場

1213号室・72名

- C-01 09:30-09:55 陶 治（慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）
ミヤオ族の「橋」、家族と祖先祭祀
——中国貴州省東南部雷山県「短裙苗」の事例——
- C-02 10:00-10:25 上帽 英之（神戸学院大学大学院人間文化学研究科地域文化論専攻）
近世橋供養碑の諸相 ——建立年代・地域・供養主旨から——
- C-03 10:30-10:55 立花 弥生（東京都）
遺骨池底埋葬と龍神信仰 ——鎌倉・仏法寺遺跡の事例をめぐって——
- C-04 11:00-11:25 篠 元晶（兵庫県）
鎌倉時代の祈雨について
- C-05 13:00-13:25 角南 聰一郎（奈良県／財団法人元興寺文化財研究所）
吉野の瓦鐘馗
- C-06 13:30-13:55 渡部 典子（兵庫県）
ハリセンボンと十二月八日と魔除け
- C-07 14:00-14:25 姜 椿姫（東京都）
鳳仙花で爪を染める習俗 ——除災習俗——
- C-08 14:30-14:55 細木 ひとみ（兵庫県）
他人のお乳で乳つけする理由
- C-09 15:00-15:25 高橋 泉（宮城県／仙台白百合女子大学）
真宗地帯の俗信 ——三国町と佐賀関町を比較して——
- C-10 15:30-15:55 大江 篤（兵庫県／園田学園女子大学）
ト部とウミガメ ——「亀卜」技術の視点から——
- C-11 16:00-16:25 佐藤 喜久一郎（群馬）
「物部神道」の地方的展開 ——『先代旧事本紀大成経』の再評価に向けて——
- C-12 16:30-16:55 小池 淳一（東京）
呪術の系譜

D会場

1311号室・77名

- D-01 09:30-09:55 伊藤 康博（埼玉県）
同族意識のあり方 ——秋田県水沢集落の場合——
- D-02 10:00-10:25 吳 賢櫛（新潟県）
韓国の族譜における女性の記述 ——大同譜の分析から——
- D-03 10:30-10:55 徳丸 亞木（茨城県）
草墳葬の現在 ——韓国全羅南道青山島の葬墓制——
- D-04 11:00-11:25 渡部 圭一（茨城県）
イッケの系譜認識と墓標・過去帳 ——葬送をめぐる文字の価値と管理——
- D-05 13:00-13:25 鈴木 洋平（埼玉県／東京大学）
石塔化する無縁 ——佐渡橋における永続的石塔の受容過程——
- D-06 13:30-13:55 エルメル・フェルトカンプ（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻）
日本におけるペットの墓と供養 ——愛玩動物の「家族化」とは何を意味するか——
- D-07 14:00-14:25 鈴木 岩弓（宮城県／東北大学）
飾られた人物写真
- D-08 14:30-14:55 沼崎 麻矢（神奈川県）
灯籠流しと慰靈 ——日航ジャンボ機墜落事故から——
- D-09 15:00-15:25 加藤 正春（岡山県）
沖縄の横穴墓（一人用一次葬墓）について ——沖縄墓制研究再考——
- D-10 15:30-15:55 林 英一（東京都／白梅学園高校講師）
近代火葬の受容 ——「火葬」と埋葬の関係——
- D-11 16:00-16:25 鈴木 由利子（宮城県）
間引きと嬰児殺 ——明治以降の事例から——
- D-12 16:30-16:55 與那霸 潤（東京都／東京大学大学院博士課程）
明治期民法典編纂過程における「家制」と「血縁」
——「誤った」日本社会の自画像の構築——

E会場

1312号室・76人

- E-01 09:30-09:55 桜井 準也（神奈川県）
伝説の生成・補強と遺物の発見
- E-02 10:00-10:25 尾崎 聰（岡山県／岡山学院大学）
備中井原の土居群について ——歴史的・民俗的景観図作成の試み その⑥——
- E-03 10:30-10:55 橋 弘文（大阪府）
祭りの起源を伝える伝説の記録について
——福井県小浜市矢代の手杵祭の起源伝説をめぐって——
- E-04 11:00-11:25 諏訪山 玲似子（東京都）
小野篁伝承とその肖像
- E-05 13:00-13:25 久下 正史（兵庫県／武庫川女子大学関西文化研究センター）
近世の性空上人伝説 ——性空上人蘇生譚を中心として——
- E-06 13:30-13:55 東條 さやか（愛知県）
津島盆 ——盆と疫病除け——
- E-07 14:00-14:25 谷川 隼也（埼玉県／國學院大學大学院修士二年）
埼玉県北部における百八燈行事の性格
- E-08 14:30-14:55 吉田 扶希子（福岡県）
『八幡愚童訓』の「降伏事」について ——高良社・与止日女社信仰の視点から——
- E-09 15:00-15:25 松村 薫子（京都府／国際日本文化研究センター）
袈裟製作活動における袈裟の信仰
- E-10 15:30-15:55 西尾 正仁（兵庫県）
造仏伝承と大伴氏
- E-11 16:00-16:25 傑谷 和子（兵庫県）
仁和寺六箇庄と覚法
- E-12 16:30-16:55 工藤 紗貴子（総合研究大学院大学・国立歴史民俗博物館）
山寺夜行念佛と平塙栄蔵坊文書

F会場

1222号室・72名

- F-01 09:30-09:55 折橋 豊子（東京都）
健康の領域 ——昭和2年～4年『家の光』の医療相談から——
- F-02 10:00-10:25 八木沢 滋夫（岩手県）
高齢者福祉における民俗慣行の役割
——事例調査による地域的慣行を指標とする高齢者福祉の分析——
- F-03 10:30-10:55 近藤 功行（愛媛県）
死生観・宗教観・世界観と障害者観を探る視点
- F-04 11:00-11:25 林 美枝子（北海道／札幌国際大学）
沖縄県粟国島の民間療法と治療儀礼
- F-05 13:00-13:25 一矢 典子（兵庫県）
壺阪寺にみる目の信仰 ——病気治しの信仰とそれを支えたモノ——
- F-06 13:30-13:55 森本 一彦（京都）
靈友会における民俗の影響
- F-07 14:00-14:25 前野 雅彦（奈良県）
南山城村を中心とする教派神道の一系譜
- F-08 14:30-14:55 平野 孝國（新潟大学）
「装おい」の芸と神態の民俗
- F-09 15:00-16:55 [分科会] もう一つの宗教民俗論 ——民俗と歴史の関係を問い合わせ直す——
代表者=白川 琢磨（福岡大学）
- F-09a 白川 琢磨（福岡大学）
顧密主義と宗教民俗 ——北部九州の事例から——
- F-09b 入江 亜矢子（福岡大学大学院）
天念寺修正鬼会の担い手と「分類」の諸問題
- F-09c 中西 裕二（福岡大学人文学部）
網野論と黒田論の間 ——二つの日本中世史論と日本民俗学——
- F-09d 政岡 伸洋（東北学院大学）
儀礼のモデルとそれが意味するもの ——滋賀県東近江市の建部祭の場合——

G 会場

1225 号室・108 名

- G-01 09:30-09:55 門田 岳久（東京大学大学院／日本学術振興会）
アプライド・フォークロリストとは誰か
——巡礼産業従事者の諸実践における民俗（学的）知識の運用——
- G-02 10:00-10:25 土居 浩（埼玉県／ものづくり大学）
永久機関としての掃苔 ——『掃苔』同人の活動とその意義——
- G-03 10:30-10:55 岸本 昌良（東京都）
風俗から民俗学へ
- G-04 11:00-11:25 桑山 敬己（北海道大学）
文化人類学から見た民俗学のフィールドワーク
- G-05 13:00-13:25 丸山 泰明（千葉県／神奈川大学）
文化政策としての民俗博物館
——国民国家・万博・天皇制と「国立民俗博物館」構想——
- G-06 13:30-13:55 矢野 敬一（静岡大学教育学部）
戦前における東京高等師範学校・東京文理科大学と民俗学
——板橋区公文書館・櫻井徳太郎文庫蔵書を事例として——
- G-07 14:00-14:25 山田 厳子（青森県）
戦略としての“福子” ——1970 年代における〈伝承〉の〈活用〉——
- G-08 14:30-14:55 岡田 浩樹（京都府／神戸大学）
民俗の再編成と文化化 ——平成の市町村合併と「最後の」町村史——
- G-09 15:00-15:25 森田 真也（福岡県／筑紫女子学園大学）
沖縄近海離島における軍用地問題と地域振興
——渡名喜島の米軍射爆演習場の事例から——
- G-10 15:30-15:55 菊地 晓（京都府／京都大学人文科学研究所）
寄せて上げる民具学 ——〈民俗学的想像力〉の再構成のために——
- G-11 16:00-16:25 山下 裕作（茨城県／独立行政法人農業工学研究所農村計画部集落計画研究室）
伝承という実践
——島根県大田市大代地区における農村環境管理活動を題材として——
- G-12 16:30-16:55 中野 紀和（東京都／大東文化大学）
「わざ」とメディアからみた「民俗」の構築過程
——小倉祇園太鼓と阿波踊りの事例をとおして——

H会場

1321号室・77名

- H-01** 09:30-09:55 **柏木 亨介**（東京都／筑波大学大学院）
神社運営における祭祀圈拡大の論理 ——寄り合いの分析を通して——
- H-02** 10:00-10:25 **能門 伊都子**（東京都／國學院大學大学院）
能登・輪島にみる祭祀と集団
- H-03** 10:30-10:55 **小山 喜美子**（兵庫県）
魚吹八幡神社の春祭りとその祭祀
- H-04** 11:00-11:25 **田中 久美子**（埼玉県）
講の変化にみる講持続の論理 ——佐賀県唐津市北波多のお大師講を事例に——
- H-05** 13:00-13:25 **伊藤 信明**（和歌山県立文書館）
後座の座配 ——紀ノ川流域の事例より——
- H-06** 13:30-13:55 **世森 かん奈**（兵庫県／神戸女子大学）
祭りの中の争う要素について
- H-07** 14:00-14:25 **川野 和昭**（鹿児島県）
収穫儀礼の二重構造 ——シキュマと八朔をめぐって——
- H-08** 14:30-14:55 **大部 志保**（福岡県）
奥（沖縄県国頭村）のシヌグ
- H-09** 15:00-15:25 **樺村 賢二**（神奈川県／神奈川大学）
周期祭と備荒備蓄 ——金砂神社の大祭礼と小祭礼から——
- H-10** 15:30-15:55 **高松 敬吉**（東京都／日本大学法学部）
肥後国相良藩の盲目
- H-11** 16:00-16:25 **宮下 良子**（東京都／跡見学園女子大学短期大学部非常勤講師）
日常的実践としてのシャーマニズム
——在日コリアンのシャーマニズムの事例分析から——
- H-12** 16:30-16:55 **村松 彰子**（東京都／成城大学）
「沖縄的な知」は商品なのか ——沖縄本島のユタクライアントの視点から——

I 会場

1322号室・76名

- I-01 09:30-09:55 矢島 妙子（東京都／名古屋大学大学院）
「都市の伝承母体」再考 ——現代祝祭「YOSAKOI ソーラン祭り」を中心に——
- I-02 10:00-10:25 田野 登（大阪）
市街地における神事伝承の底流 ——野里住吉一夜官女祭を軸に——
- I-03 10:30-10:55 阿南 透（東京都／江戸川大学）
祝祭としての運動会 ——釧路市民大運動会の事例から——
- I-04 11:00-11:25 加原 奈穂子（早稲田大学）
多様性の中の地域性 ——「おかやま桃太郎まつり」の事例を中心に——
- I-05 13:00-13:25 由谷 裕哉（石川県／小松短期大学）
名君をめぐる言説と地域おこし ——小松市における前田利常崇敬・続考——
- I-06 13:30-13:55 石井 克生（福島県）
ニュータウンの老人会
- I-07 14:00-14:25 伊賀 みどり（埼玉県）
ライフヒストリーにみる開業助産婦の戦後
- I-08 14:30-14:55 加賀谷 真梨（神奈川県／お茶の水女子大学）
沖縄研究にみられる「俗世界における男性優位・女性劣位」言説の再検討
——生活改善普及事業に対する女性の取り組みを通じて——
- I-09 15:00-16:55 [分科会] 戦後の生活改善諸活動と民俗
代表者=田中 宣一（神奈川県）
I-09a 小島 孝夫（埼玉県）
生活改善諸活動の実践とその影響 ——埼玉県行田市を事例として——
I-09b 田中 宣一（神奈川県）
昭和30年前後の長野県洗馬村の生活改善関係の動き
I-09c 山崎 祐子（神奈川県）
生活改善実行グループの活動
I-09d 富田 祥之亮（神奈川県／社団法人全国農業改良普及支援協会）
戦後の生活変化と生活改善 ——農業改良普及事業における生活改善——

J会場

1232号室・72名

- J-01 09:30-11:25 [分科会] 地域民俗誌の課題と実践 ——遊佐町民俗調査より——
/13:00-15:55 代表者=神田 より子（新潟県／敬和学園大学）
- J-01a 宮坂 清（東京都／宗教情報リサーチセンター）
近自然河川改修と流域の暮らし ——山形県遊佐町八ツ面川を事例として——
- J-01b 神田 より子（新潟県／敬和学園大学）
旧修驗集落の抱える課題 ——山形県遊佐町蕨岡地域を中心に——
- J-01c 中山 和久（東京都）
「おまいり」文化考
- J-01d 藤野 陽平（東京都／慶應義塾大学大学院）
癒しの場としての公共温泉 ——山形県遊佐町あぽん西浜を事例として——
- J-01e 猿渡 土貴（東京都）
七五三の普及過程に関する一考察 ——遊佐町の事例より——
- J-01f 岸 昌一（埼玉県）
鳥海山麓の民間信仰=石碑等を中心として
- J-01g 小川 修（慶應義塾大学修士課程社会学部社会学専攻）
「家」の再編過程における先祖祭祀の動態
- J-01h 森 悟朗（千葉県／國學院大學大学院 COE 研究員）
地域社会における祭祀の動態的考察 ——山形県遊佐町藤崎を事例として——
- J-01i 市田 雅崇（東京都／慶應義塾大学大学院）
御浜出神事から火合わせ神事へ ——祭祀の変容と地域社会の展開——
- J-01j 鈴木 正崇（東京都）
人形の民俗 ——遊佐のヤサラの場合——

K会場

1331号室・140名

- K-01 09:30-09:55 渡辺 一弘（東京都）
国策旅行ブームと宮崎観光 ——小説家中村地平の功績——
- K-02 10:00-10:25 岩橋 麟州（神奈川県／東京大学）
美しい「民俗」 ——文化政策の中の「民俗」、語られる美意識——
- K-03 10:30-10:55 宮岡 真央子（東京外国語大学大学院）
台湾の文化政策と周縁社会の実践・葛藤 ——阿里山ツォウの事例から——
- K-04 11:00-11:25 野口 憲一（茨城県／日本大学大学院博士前期課程二年）
民俗と行政 ——行政が関与する民俗関連の領域の類型化——
- K-05 13:00-13:25 蘇理 剛志（兵庫県／総合研究大学院大学）
山村の民俗技術と現代 ——和歌山県清水町・高齢者生産活動センターを事例に——
- K-06 13:30-13:55 小野寺 節子（東京都）
「ふるさと文化再興事業」の民俗学的評価
- K-07 14:00-14:25 片倉 綾子（宮城県／東北学院大学）
地方行政政策の展開と民俗芸能
——宮城県栗原市栗駒の南部神楽の事例を中心に——
- K-08 14:30-14:55 今井 信（滋賀県）
淡海節の研究 ——伝承と継承——
- K-09 15:00-15:25 安藤 直子（宮城県）
蒼前信仰の変遷における地方自治体の関係
- K-10 15:30-16:55 [分科会] 民俗 / 文化を担うのは誰か ——ヨーロッパにおける議論から——
代表者=法橋 量（神奈川県）
K-10a 法橋 量（神奈川県）
ドイツにおけるアソシエーションと文化
——南西ドイツの祭礼協会の組織と中心人物——
K-10b 出口 雅敏（東京都）
フランスの地域自然公園における文化媒介者
——ヴォージュバロン地域自然公園と公園の家——
K-10c 竹中 宏子（東京都）
スペインにおける「地域文化コーディネーター」
——フィステーラームシア巡礼路（サンティアゴ巡礼路）をめぐって——

ア ク セ ス

[研究大会会場]

京王井の頭線「渋谷」駅より各停で2つめの「駒場東大前」駅下車、徒歩3分（急行はとまりません）。

[懇親会会場]

同じく「駒場東大前」駅下車、徒歩7分。



[主要駅からの所要時間]

- ▽東京駅より 45 分
- ▽品川駅より 30 分
- ▽新宿駅より 20 分
- ▽渋谷駅より 7 分
- ▽京急羽田空港駅より 55 分
- ▽モノレール空港第2ビル(ANA)より 60 分
- ▽モノレール空港第1ビル (JAL)より 55 分

※京王井の頭線「駒場東大前」駅まで、乗換時間を含む目安。

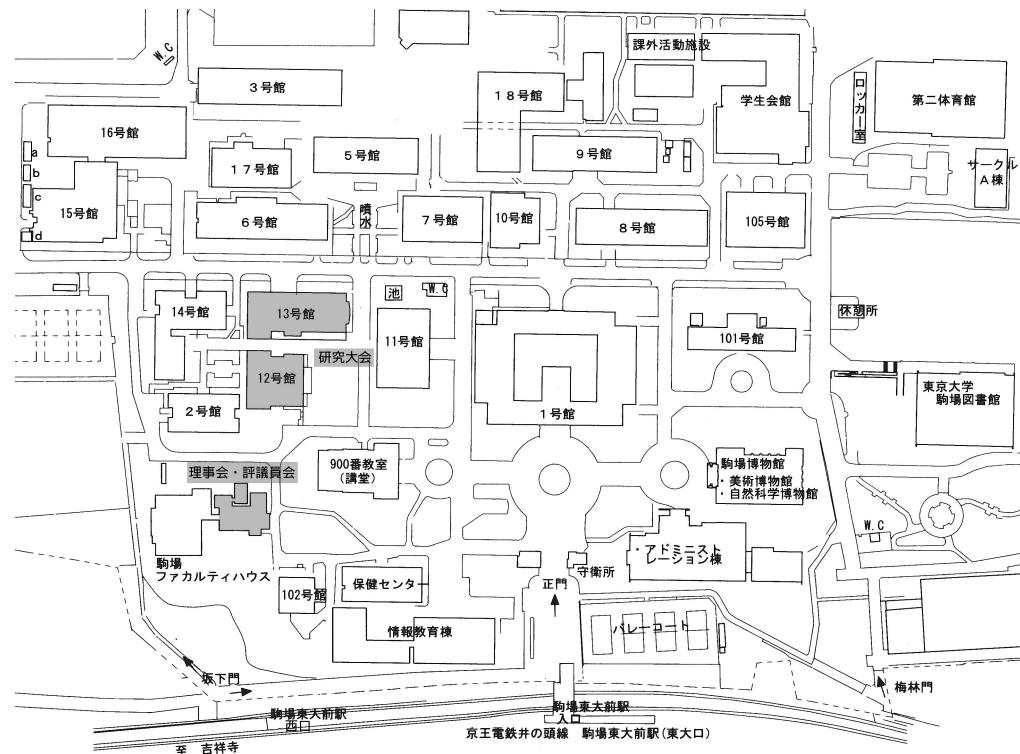
会場の駒場キャンパスは、都心にある本郷キャンパスとは異なります。お間違えのないようご注意ください。

会場周辺地図

- 上の円：
研究大会会場
下の円：
懇親会会場



構内地図



※京王井の頭線渋谷駅より各駅停車利用（急行は止まりません）

- ▽各駅停車は、土日昼間は6分おきに運転しています。
- ▽渋谷駅よりご乗車の際は、後ろの車両をご利用ください。
- ▽駒場東大前駅の出口は東側（渋谷に近い側）東大口へ上がっていただき、正門よりお入りください。

※キャンパス内は禁煙です。

- ▽9月1日現在、指定喫煙場所の設置を大学側と折衝中です。年会当日受付にてご案内いたします。

12・13号館内の各会場配置図は8ページをご覧ください。

年会参加者のみなさまへ

交通

▽ 20 ページの交通案内をご覧ください。

受付・総合案内

10月8日(土)……11:30～ 12号館 1F ホール

10月9日(日)……09:00～ 12号館 1F ホール

▽受付では、お名前をおっしゃっていただいたうえ、紙袋と名札をお受け取りください。

▽当日の参加申し込みをされる方は、「当日申し込みカウンター」にてお申し込みください。研究大会参加費 5,000 円・懇親会参加費 7,500 円（学生は 5,500 円）です。

▽ 8月31日時点での参加費納入状況を、同封の別紙にてご確認ください。

名札

▽会場では、常時、名札をおつけください。特に、懇親会に参加されるときには、参加の印のついた名札が必要になります。

▽名札は、お帰りの際に、スタッフまたは回収箱へお返しください。

懇親会

▽懇親会は 8 日 (土) 19:00 から、駒場エミナースにて行ないます。

▽当日懇親会場で懇親会への参加を申し込まれる方は、受付横の「参加申込みカウンター」にてお申し込みください。参加費は 7,500 円（学生は 5,500 円）です。ただし、当日参加可能人数には限りがありますので、ご承知おきください。

昼食弁当

▽事前に弁当を申し込まれた方は、当日受付にて引換券をお渡しいたします。休憩室 2 （1226 号室）にてお引き換えください。

本部

▽8日・9日とも 12号館 1F 1211 号室に設置しています。

休憩

▽13号館 1F 1313 号室（休憩室 1）、12号館 2F 1226 号室（休憩室 2）、12号館 2F 1224 号室（休憩室 3）をご利用ください。なお、8日(土)は、休憩室 1 は 11 時～13 時のみの開設となります。

喫煙場所

▽現在、喫煙場所の設置を大学側と折衝中です。当日ご案内いたします。

書籍展示販売

▽8日・9日とも、13号館 1F ホール・2F ホールにて行ないます。

▽両日とも、15 時から宅配業者が会場に出張し受付けますので、ご利用ください。

その他

▽発表会場内では、携帯電話のスイッチは必ず切ってください。

▽コピーは、会場内ではできませんが、大学周辺のコンビニ等のコピー機が利用できます。コンビニ等の場所は、受付にお問い合わせください。

▽授乳室を設けておりますので、ご希望の方は受付・総合案内にてお申し出ください。

一般発表者のみなさまへ

発表受付

- ▽各発表者は、12号館1Fホールで参加受付を済ませたのち、ご発表時間の30分前までに、ご自分の発表する会場の会場係にお申し出ください。ただし、午前最初の発表者の方は9時15分まで、午後最初の発表者の方は午前発表終了後の11時40分までにお申し出ください。
- ▽発表者は、前の発表が始まるまでに発表会場の「次発表者席」に着席のうえ待機してください。ただし、午前最初の発表者の方は9時20分より、午後最初の発表者の方は12時50分より待機してください。

配付資料

- ▽配付資料がある場合は、あらかじめご用意のうえ、発表受付時に会場係にお渡しください。
- ▽各発表会場の座席数は、6～7ページのタイムテーブルにてご確認ください。
- ▽配付資料を事前に送付されることのないようにお願いします。

試写室

- ▽発表の準備のための試写室は、12号館2F1221号室に用意しておりますので、隨時ご利用ください。

PC用液晶プロジェクター

- ▽パソコンは、各自ご持参ください。会場にも予備のPCは準備しておりますが、トラブルを避けるためにも、できるだけ自身でお持ち込みくださるよう、お願い申し上げます。
- ▽発表用卓上にあるケーブル端子とパソコンを接続させてご利用ください。使用法が分からない場合は、発表会場の会場係にお尋ねください。ケーブルは当方で用意しますが、ご持参のものをお使いいただくこともできます。

スライド

- ▽スライドは発表受付前に試写室において係員からホルダーを受け取り、発表者自身で装填して発表会場の会場係にお渡しください。
- ▽発表終了後は、スライドを抜き取ったホルダーを発表会場の会場係にお戻しください。

OHP

- ▽発表者ご自身で操作してください。使用法が分からない場合は、発表会場の会場係にお尋ねください。

ビデオ・DVDプレーヤー

- ▽ビデオデッキ・DVDプレーヤーは発表卓の内部に備え付けています。ご自身でメディアを挿入して映写してください。お分かりにならない場合は、発表会場の会場係にお尋ねください。

発表時間

- ▽発表20分・質疑5分とし、以下のように、ベルでお知らせします。とくに終了時間は厳守くださいますよう、お願いします。
 - 17分経過=ベル1回（発表終了3分前）
 - 20分経過=ベル2回（発表終了）
 - 25分経過=ベル3回（質疑応答終了）
- ▽発表者、聴講者の交代のため、各発表の間に5分の時間をとります。
- ▽発表者の責任により発表の開始が遅れた場合には、定刻の範囲内で発表・質疑応答を行ってください。
- ▽発表者が欠席した場合でも、発表は予定の時間割とプログラムにより進行します。

分科会発表者のみなさまへ

発表受付

▽各分科会代表者は、分科会メンバーがそろったことを確認のうえ、発表時間の30分前までに、発表会場の会場係にお申し出ください。ただし、午前最初の分科会代表者の方は9時15分までにお申し出ください。

発表時間

▽プログラム記載の通りです。時間厳守でお願いします。

使用器材・発表資料

▽取り扱いは、23ページの一般発表の場合と同様です。

座長

▽座長は置きませんので、質問の受け付けや時間配分等の運営は、決められた時間内で、自由に行なってください。

一般発表の座長のみなさまへ

受付

▽ご担当の発表が始まる30分前までに発表会場の会場係にお申し出のうえ、発表会場の「次座長席」に着席下さい。ただし午前最初・午後最初の座長の方は、開始10分前までに入室して下さい。

進行

▽タイムキーパーは、23ページに記した時間通りにベルを鳴らします。このベルを参考にして、発表が時間通りに行われるようご配慮をお願いします。

▽各発表の間に設けられた5分間は、あくまで交代のための時間で、延長のためのものではありません。

日本民俗学会第 57 回年会実行委員会

年会会長 宮本袈裟雄
委員長 岩本通弥
委員 菅 豊 (広報責任者)
中村 淳 (会場責任者・事務局)
青木隆浩 (会計責任者)
李 英珠 伊藤亞人 岩橋磨州 小川直之
門田岳久 香西豊子 小玉博亮 鈴木洋平
田中大介 エルメル・フェルトカンプ
安室 知 與那霸 潤

事務局・問い合わせ先

東京大学駒場キャンパス 14 号館 4 階 中村研究室気付
〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
[TEL] 03-5454-6242 [FAX] 03-5454-4351
[E-mail] 57-nenkai@juntak.c.u-tokyo.ac.jp
[URL] <http://wwwsoc.nii.ac.jp/fsj/enkai/57-tokyo.html>